

かしわもちとちまきを包む植物に関する植生学的研究

服部 保^{1)*}・南山 典子¹⁾・澤田 佳宏¹⁾・黒田 有寿茂^{1)*}

A vegetational study on the plant leave wrapping kashiwamochi and chimaki

Tamotsu HATTORI^{1)*}, Noriko MINAMIYAMA¹⁾, Yoshihiro SAWADA¹⁾
and Asumo KURODA^{1)*}

Abstract

Kashiwamochi and Chimaki are traditional types of rice dumpling that are offered to gods during the Boys' Festival in Japan. The former is stuffed with azuki bean jam and wrapped mostly in one or two leaves, and the latter is wrapped wholly in a few leaves without bean jam. We investigated the species name of the leaves used for wrapping these dumplings, the local names of the dumplings, and other related issues by reference to publications and a questionnaire conducted in 424 localities ranging from Okinawa Prefecture to Aomori Prefecture. We then checked the species whose leaves were used for wrapping the dumplings in relation to their geographical distributions, habitats, and plant communities (phytosociological rank), on the basis of published papers.

It was found that 17 and 21 species were used for wrapping Kashiwamochi and Chimaki, respectively. Representative species used for wrapping Kashiwamochi were *Smilax china* (128 localities), *Quercus dentata* (57 localities), *Magnolia obovata* (7 localities), and *Zingiber mioga* (7 localities). *Smilax china* was used mainly in Western Japan and to a small extent in the Kanto district and on Sado Island. *Quercus dentata* was used throughout the Kanto district. Representative species used for wrapping Chimaki were *Sasa* spp. (108 localities), *Phragmites communis* (28 localities), *Miscanthus sinensis* (22 localities), *Phyllostachys* spp. (14 localities), *Zizania latifolia* (8 localities), and *Alpinia speciosa* (7 localities). *Sasa* spp. were mostly used in the districts along the Sea of Japan coast. *Miscanthus sinensis*, *Phragmites communis*, and *Zizania latifolia* were used in the districts along the Pacific coast. *Phyllostachys* spp. and *Alpinia speciosa* were used mainly in southern Kyushu and Okinawa Prefecture, respectively.

Except for *Quercus dentata*, the species used for wrapping dumplings were distributed in the neighborhood of the villages and grew in the common communities ranked Rosetea multiflorae, Carpino-Quercion serratae, Pinion densiflorae, Miscanthetea sinensis, and Phragmitetea, which composed the rural landscape.

Key words : boys' festival, chimaki, fuelwood forest (satoyama), kashiwamochi, vegetational study, plant community

¹⁾兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Ecological Restoration, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo ; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

* 兼任 : 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Institute of Natural and Environmental Sciences, University of Hyogo ; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

はじめに

著者らは、蝶類群集と植物群落との対応関係、社寺林への人為的影響、照葉人工林の種多様性、里山林の歴史的な考察などの植生学と他分野との境界領域の研究を進めてきた(服部ほか, 1997, 2001, 2003, 2005; 服部・石田, 2000)。これらの研究が示すように、植生学は動物生態学だけではなく歴史学、文学、考古学、民俗学などの他分野の研究に今までとは異なった視点からの新たな展開を促す可能性が高い。本論文では日本人の重要な年中行事である端午の節句などに供えられるかしわもちとちまきを取り上げ、それらのもちを包む植物について植生学の視点から考察した。かしわもちやちまきに利用される植物については各地で民俗調査や食事に関する調査が行われ、多数の報告書や論文がまとめられている(日本の食生活全集編集委員会, 1984~1992eなど)。また、利用植物の植物学からの分析や考察も行われている(細見, 1992)。しかし、それらの報告や研究は行事や食事等の記録が中心であり、植物に関する内容は、種の地方名の記述か標準和名の同定の問題にとどまっている。また、小地域の調査報告が多く、広い地域のかしわもち、ちまきについて論じたものは文化庁(1969)および亀井(1996)を除くとほとんど見られない。利用植物の生育環境や全国分布については、まったく調査されておらず、総合的に考察された例はない。

著者らは、多数の地域におけるかしわもちとちまきの利用植物を文献等をもとに調査し、利用植物の全国状況を明らかにしようとした。さらに、それらの結果をもとに各地域における利用植物と植生との関係を示し、端午の節句などの年中行事に用いられた植物が身近な里地・里山の植生の構成種であることを明らかにしようとした。植物に関連する民俗研究の成果を植生学的な視点から解析することによって新たな研究分野(民俗植生学)の誕生が期待されるが、本研究はそれへの第一歩としたい。

調査方法

かしわもちとちまきの利用植物等の調査

大正末期から昭和初期にかけての都道府県別の代表的な地域の食生活を記録した全集が出版されている。この日本の食生活全集の46巻(日本の食生活全集編集委員会, 1984~1992e)を基礎的な資料として、沖縄県より青森県に至る46の全都道府県のかしわもちとちまきの以下に示した項目について調査した。情報不足の地域については、南日本新聞社(2004)、谷垣(1973)、兵庫県教育委員会文化課(1970, 1972, 1974)、青野川・黒川水系民俗調査団(1979)、川西市教育委員会社会教

育課(1975)、赤穂民俗研究会(1989, 1992)、斉藤(1995)、愛媛県生涯学習センター(2004)、滋賀の食事文化研究会(2001)、豊能町史編纂委員会(1987)、伊藤(1990)、千畑村郷土誌編纂委員会(1986)、仙南村史編纂委員会(1992)、本荘市(2000)、若美町史編纂委員会(1981)、井川町史編纂委員会(1986)、八郎潟町史編纂委員会(1977)、大館市史編纂委員会(1981)、大雄村史編纂委員会(2001)、秋田市(2003)、能代市史編纂委員会(2004)、角館誌編纂委員会(1985)、鳥海町史編纂委員会(1985)、阿仁町史編纂委員会(1992)、増田町史編纂委員会(1997)、男鹿市史編纂委員会(1995)や聞き取り調査等を参考とした。それらの文献や聞き取り調査においても調査対象の年代は大正末期から昭和初期ごろとした。

調査項目は調査地の地名、かしわもち型、ちまき型の区分、利用植物(もちを包む植物を対象とし、ひもとして利用されている植物は対象外とした)の標準和名と地方名、もちの地方名、葉の利用形態(包み方)、もちの種類(モチ、ダンゴ、コワメシ)、もちの材料(米粉、もち米粉、もち米など)と製法、あんの有無、もちの形状、時期・行事などとした。調査の対象年代としては大正末期から昭和初期(1920年代から1940年代)とした。

なお、かしわもち、ちまきの形態、内容等は地域ごとに大きな差がある。本論文では端午の節句等の行事に供えられる、植物の葉(タケの皮を含む)で包んだもち(節句もちと略す)をかしわもち、ちまきと定義した。あん入りもちの上面・側面・下面の3方を1枚の葉で包む(本論文ではこれをくるむタイプとした)か、又はあん入りモチの上下面を2枚の葉で包んだ(本論文ではこれをはさむタイプとした)節句もちをかしわもち型、あん無しもち全体を何枚かの葉で隈無く包み、その包まれたもちをイグサ等で巻いて結んだ(本論文ではこれをつつみこんでまくタイプとした)節句もちをちまき型とした。あん入りもちをササの葉とイグサでつつみこんでまくタイプの節句もち、あん無しもちを2枚のササの葉で十文字に包んだ(本論文ではこれをつつむタイプとした)節句もちのような中間タイプはちまき型とした。サルトリイバラなどの一枚の葉の上のにせた(本論文ではこれをしくタイプとした)節句もちはかしわもち型に含めた。

利用植物の種名は地方名で記録されているので、日本植物友の会(1967)や文章中の記載事項を参考に標準和名を推定した。

もちの種類については、蒸したもち米を臼に入れ、杵でついた「モチ(餅)」(通常もちとよばれるものはこれを指す)、水を加えたもち米粉、米粉、麦粉などの穀類の粉を混ぜながらよくこねた後、それを蒸したか、ゆでた「ダンゴ(団子)」(月見ダンゴが代表、最近のかしわもち、ちまきのもちはこれである)、モチ米をササの葉やタ

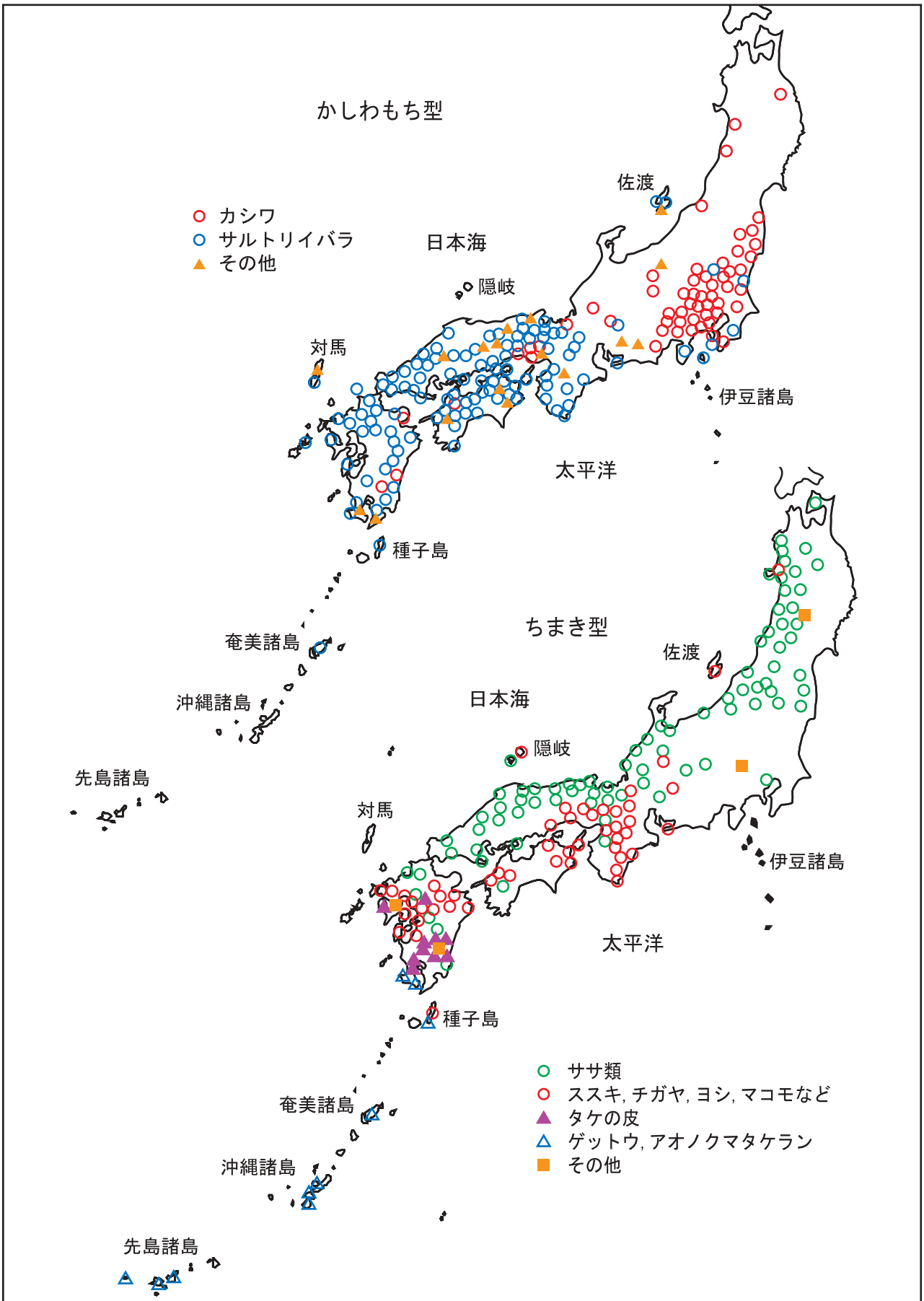


図1 かしわもち型とちまき型に利用する植物の分布

マコモ、ゲットウ、トチノキ、ナラガシワなどが利用されていた。ほとんどの地域では1個のちまき型を作るのに利用する植物は1種類であるが、2種類の植物を利用する例が16地点で認められた。ナラガシワ、カシワ、アベマキ、クリなどの広葉とヨシカススキとの組合せが多く、その他、ササ類とススキ、ササ類とマコモ、ササ類とヨシといった組合せが認められた。ナラガシワ、カシワ、アベマキ、クリ、ササ類はヨシ、ススキ、マコモで包む前の下包みとして利用されていた。ちまき型に利用されたササの種名は、兵庫県但馬地方のチマキザサ（表1にはササ類でまとめている）や大阪府のヤダケを除いて文献には示されていない。これはササ類の同定の難しさもあるが、特定の種が利用されたのではなく、人家の近くにある各種ササ類が利用されていたことによっていた（渡辺，1996）。ササの利用は裏日本側に集中しているので裏日本側に分布の中心を持つササ属、チマキザサ節のササが主として利用されていると考えられた。利用植物の地理的分布をみると、裏日本側ではササ類、中部以西の表日本側ではヨシ、ススキ、マコモ、チガヤといったイネ科の夏緑多年生草本、九州中・南部ではタケの皮（稗鞘）九州南部から琉球列島ではゲットウがよく利用されていた（図1）。なお、本論文では鈴木（1962）に基づいて、裏日本、表日本という用語を使用している。

節句もちの地方名

節句もちの地方名を表2に示した。かしわもち型の地方名としてはかしわもち（かしわだご、かしわまんじゅうなどを含む）がもっとも多かった。カシワを用いたかしわもち型の名称はほとんどがかしわもちであった。サ

表2 節句もちの地方名

地方名	地点数
かしわもち型	
かしわ(もち、だご、まんじゅう、まき)、おかしわ	98
しば(もち、だんご)	22
ちまき、ちまきもち、つまき	9
かから(だご、まんじゅう、もち)	8
おまき、まき	7
だんご	5
いばら(だんご、もち)	5
いぎのは(だんご、もち)	4
がめのは(まんじゅう、もち)	4
おさすり	4
いびつもち	4
ちまき型	
ちまき、つまき、ちまきだんご、つまきだんご、たごちまき	68
ささまき	37
ささもち	21
まき(まんじゅう、だんご)	15
かや(もち、ちまき、まき)、がやまき	7
むーちー、かーさーむーちー、くばがーさーむーちー	7
さんかくちまき、さんかくまき	5
あくまき	5
ひしまき	4
つのまき	4

ルトリイバラを用いたかしわもち型の地方名はかしわもち、しばもち、ちまき、かからだご、おまき、だんご、いばらもちなど地方ごとに特色のある名称が用いられていたが、シバ、カカラ、イバラ、ガメ、サンキラなどのサルトリイバラの地方名（日本植物友の会，1967）をもとにした名称が多かった。

ちまき型に利用する植物はササ類からヨシ、ススキ、タケの皮など多岐にわたっていたが、利用植物とは無関係に地方名はちまきが多かった。ササを使用するちまき型はささまき、ささもちなどの地方名が多く用いられていた。ススキ、ヨシなどを利用する場合はちまき以外にかやまき、かやもち、よしもちなどの地方名が用いられていた。タケの皮を利用する場合の地方名はあくまきが多かった。

もちの種類

かしわもち型、ちまき型のもちの種類、包み方などを表3にまとめた。かしわもち型、ちまき型の両者とも「モチ」を使用していた例は、新潟県、山形県のささもちなどきわめて少なかった。かしわもち型、ちまき型共に琉球列島から本州北端までもっともよく用いられていたモチは、穀類の種類やそれらの配合の割合は地域によって差はあるが、「ダンゴ」であった。「コワメシ」は九州のあくまき、新潟以北の裏日本側のささまき、ひしまきなどのちまき型に限られた。両地域以外では「コワメシ」系のちまきは少なかった。

利用植物の分布、立地、植生単位、頻度

利用植物の地理的分布、生育立地、生育する植生単位について表4にまとめた。各地域を代表する里山林における利用植物の出現頻度については表5に示した。

かしわもち型によく用いられているサルトリイバラの地理的分布は、九州南部から北海道渡島半島南端までの山岳地帯を除く広い地域に分布していた（表4）。出現植生をみると、自然植生には稀で里山林や林縁群落によく出現し、ノイバラクラスやイヌシデ - コナラ群団の構成種であった（表4）。サルトリイバラは山地部を除く九州

表3 節句もちの代表的な名称、利用植物の包み方、もちの種類、あんの有無（代表例であって、名称と利用植物等がここに示したように一致しているのではない）

もちの区分	名称	利用植物	包み方	もちの種類
かしわもち型 (あんの有)	かしわもち	カシワ	くるむ	ダンゴ
	しばもち	サルトリイバラ	はさむ	ダンゴ
ちまき型 (あんの無)	ちまき	ササ類	つつみこんでまく	ダンゴ
	むーちー	ゲットウ	つつみこんでまく	ダンゴ
	あくまき	タケの皮	つつみこんでまく	コワメシ
	ささもち	ササ類	つつむ	モチ

から東北地方のアカマツ林，コナラ林，コジイ林などのいずれの里山林でも出現頻度は高かった（表5）。

カシワの地理的分布は九州（種子島）から北海道に及ぶが，東北地方，北海道を除くと分布地点は少なかった（田村ほか，1999）。生育立地で見ると北日本では海岸砂丘，海岸の急傾斜地，石灰岩地，草原に多く，近畿以西の日本海側では京都府から対馬までの海崖にわずかに分布し，中国山地，九州山地などの草原ではカシワの疎林が点在していた（田村ほか，1999）。カシワの優占林は3群集，1群団（カシワ群団）にまとめられ（宮脇ほか，1994），それらはいずれも東北地方，北海道の海岸風衝地の土地的極相であった。中部地方や東北地方の内陸部ではカシワが里山林の構成種となっている例（コナラ-カシワ群集）もみられたが，カシワの出現頻度はきわめて少なかった（表5）。関東以西では里山林へのカシワの出現は稀であった（表5）。カシワは，里地・里山や身近な立地に分布する樹木ではなかった。

ササ属，チマキザサ節の地理的分布は裏日本側の多雪地域に限られていた（表4）。出現植生は路傍，林縁，里山および自然林など多様であった。チマキザサ節はコナラ-オクチョウジザクラ群集やブナ-チシマザサ群団などの主要構成種であり，裏日本側の里山林での出現頻度は高かった（表5）。

タケ類は沖縄県から東北地方まで広く植栽されているが，分布は西日本，特に九州に多かった。マダケ，ハチクは農業用の各種資材，モウソウチクはタケノコ生産として利用されており，全国の里地・里山に点々と分布していた。

ススキは沖縄県から北海道までの国内の至る所に分布していた。大規模な刈り取り草原だけでなく，海岸，畦

畔法面，路傍にも生育しており，里地・里山の代表種であった。植物社会学的にはススキクラスの標徴種であり，主要構成種であった。

ヨシは地理的には全国に分布し，生育地は河川，湖，池沼，湿地などの湿潤な立地であった。小川や小さなため池にも生育しており，里地・里山の構成種であった。ヨシはヨシクラスを標徴する代表種であった。

コナラ（愛媛県，鳥取県，兵庫県，大阪府），ナラガシワ（香川県，広島県，岡山県，兵庫県），カシ類（徳島県，兵庫県），ホオノキ（岡山県，岐阜県，静岡県，茨城県など），アカメガシワ（宮崎県），ダンチク（鹿児島県種子島，長崎県）などの利用植物は，いずれも利用されたその地域では里地・里山の植生あるいは付近の海岸，河川に普通に出現する種であり，コナラ，アラカシ，ホオノキなどの出現頻度は高かった（表5）。

考 察

ちまき型の利用植物

楚の屈原を弔うために始まったとされる端午の節句の行事は中国から伝えられたものであり，その行事に使用される供物の粽（zongzi）は，中国では竹筒におさめた米をセンダンの葉で包み，糸で結んだものが最初とされている（下中，1961）。一方，ちまきという用語は，もちを意味したものではないが，日本書紀（720年）の「茅纏之鎖」（茅をまとった鎖・茅巻きの鎖）に始まる（松田，1970）。神聖なものあるいは呪力をもったものとされたチガヤは，夏越しの祓の儀式に用いられる茅の輪の材料として使用される（神戸新聞社会学芸部，1971）他，神聖さゆえに供物である粽を包む適材として国内で

表4 節句もちの地理的分布，生育立地，植生単位

植物名	地理的分布	生育立地	植物社会学上の植生単位
<i>Smilax china</i>	サルトイバラ 九州～北海道南部	林縁，里山林	Rosetea multiflorae(ノイバラクラス)， Camellietea japonicae(ヤブツバキクラス)， Carpino-Quercion serratae(コナラーイヌシデ群団)， Pinion densiflorae(アカマツ群団)
<i>Quercus dentata</i>	カシワ 九州～北海道	海岸風衝地，海崖， 刈り取り草原，石灰岩地，(栽培)	Quercion dentatae(カシワ群団)
<i>Magnolia obovata</i>	ホオノキ 九州～北海道	里山林，夏緑自然林	Fagetea crenatae(ブナクラス)
<i>Zingiber mioga</i>	ミウガ	(栽培)	—
<i>Quercus aliena</i>	ナラガシワ 九州～中部地方	里山林	Carpino-Quercion serratae(コナラーイヌシデ群団)
<i>Sasa</i> (Sect. <i>Sasa</i>) spp.	ササ spp. 裏日本	里山林，夏緑自然林	Saso kurilensis-Fagion crenatae(ブナーチシマザサ群団)， Pruno pilosae-Quercetum serratae (コナラーオクチョウジザクラ群集)， Rhododendro niphophili-Pinetum densiflorae (アカマツ-ユキグニミツバツツジ群集)
<i>Phragmites communis</i>	ヨシ 九州～北海道	湖，湿地，池沼，河川	Phragmitetea(ヨシクラス)
<i>Miscanthus sinensis</i>	ススキ 沖縄～北海道	海岸風衝地，刈り取り草原，畦畔	Miscanthea sinensis(ススキクラス)
<i>Phyllostachys</i> spp.	タケ類 沖縄～東北地方	(栽培)	—
<i>Zizania latifolia</i>	マコモ 沖縄～北海道	湖，湿地，池沼	Phragmitetea(ヨシクラス)
<i>Alpinia speciosa</i>	ゲトウ 沖縄～九州南部	林縁，里山林，照葉自然林， (栽培)	Camellietea japonicae(ヤブツバキクラス)

は利用され、茅巻きが誕生したのと考えられる。茅巻き(もちとしてのちまき)の記載は、伊勢物語(890年ごろ)が最初であり(新村, 1955), その製法は和名類聚鈔(931~938年)にもち米を植物の葉で包み、灰汁で煮込むとされている。これは現在のあくまきと同じ製法であり、下中(1962)が述べているようにあくまきがちまきの原型と考えられる。その後、本朝食鑑(1697年)には4種のちまき(モチをマコモでつつみこんでイグサでまいたもの、ダンゴをササの葉でつつみこんでまいたもの、コワメシをワラでつつみこんでまいたあくまき系のものなど)が紹介され、現在と同じモチ系、ダンゴ系、コワメシ系が江戸時代初期に存在したことになる。また、円錐形のだんごをササ数枚でつつみこんでイグサでまいた現在の京風のちまき(現在、一般に市販されているちまき)と同形のものが、この時期に京都で考案されたといわれている(山本, 2004)。

チガヤ利用のちまきから地域ごとに多様な植物利用に移行したのか、あるいは古代より地域ごとに様々な植物がちまきに利用されてきたのかは、古典、古文書にも記述がなく不明である。しかし、江戸時代初期には上述したように植物、もちの両者ともに多様なちまきが存在したと考えられる。

もちの包み易さから考えると、チガヤのような細長い葉は利用しにくい。今回の調査によって、原型と考えられるチガヤのちまきが愛媛県宇和島市で1例しか確認できなかったのはそれを反映しているように思われる。葉の使いやすさからみるとチガヤよりもススキ、ススキよりもヨシ・マコモ、ヨシ・マコモよりもササ類が適しているが、表日本側では広い葉のササ(チマキザサ節)が少ないため、身近に存在するススキ、ヨシ、マコモなど

が利用されたと考えられる。淀川、猪名川、琵琶湖あるいは裏日本側でもササの分布が限られる八郎潟、福井平野などの水辺の地域ではヨシ、マコモが利用されている。これらの地域にもススキはごく普通に分布しているが、葉がより広く利用しやすい身近なヨシ、マコモが利用されたのであろう。裏日本側ではススキ、ヨシ、マコモも普通に分布しているが、身近で扱いやすいササの利用が一般化したと考えられる。葉の広さからみるとタケの皮やゲットウ、アオノクマタケランも包みやすく、東南アジアを含めてそれらが身近に分布している地域では、現在でもそれらの植物が積極的に利用されている。

ササでつつみこんでイグサでまくといった京風のちまき、正三角錐にササでつつみこんでイグサでまいたささまき、ひしまき、ナラガシワやくヌギで下包みした後にさらにヨシでつつみこんで、シュロでまいたつまきなど各々の地域の固有の文化を感じさせるちまきであるが、それらに利用されるススキ、ヨシ、マコモ、ナラガシワなどの植物は各々の地域の里地・里山の主要な構成種・普通種の中から地域の伝統・文化に則って選択されたと考えられる。

かしわもち型の利用植物

カシワ(柏)は炊ぐ葉に由来し、炊事に利用されたとされている(松田, 1980; 細見, 1992, 1999)。隋書(636年)の倭国の項には日本人が櫺(カシワ)の葉を食器がわりに使用しているといった記録がある(野本, 2005)。また、カシワは古事記(712年)、日本書紀(720年)、万葉集(759年ごろ)などの古典や歌集にも記されており、延喜式(平安時代中期(967年)に記された律令の施行細則)には仏会、節会などの饗宴の食器として

表5 里山における節もち利用植物の総合常在度表

植物名	No.	都府県名																																																		
		1 鹿島	2 宮城	3 岩手	4 秋田	5 山形	6 福島	7 茨城	8 栃木	9 群馬	10 東京都	11 千葉県	12 埼玉県	13 茨城県	14 栃木県	15 群馬県	16 東京都	17 千葉県	18 埼玉県	19 茨城県	20 滋賀県	21 京都府	22 大阪府	23 兵庫県	24 岡山県	25 広島県	26 四国	27 高知県	28 福岡県	29 佐賀県	30 長門県	31 山口県	32 徳島県	33 香川県	34 愛媛県	35 高知県	36 福岡県	37 佐賀県	38 長門県	39 山口県	40 徳島県	41 香川県	42 愛媛県	43 高知県	44 新潟県	45 山形県	46 秋田県	47 青森県	48 岩手県			
調査区数		14	5	5	6	32	7	5	5	14	9	23	16	20	23	25	45	34	20	23	8	6	15	40	12	6	18	18	8	10	45	15	10	9	8	9	12	14	36	22	25	15	5	34	31	5	8	14	12	12	37	
樹林名		1	5	5	5	1	1	2	5	1	1	1	1	1	1	1	1	6	6	6	6	3	6	4	4	6	6	6	1	6	7	6	6	1	1	1	7	6	1	6	6	1	7	6	6	1	7	6	6			
<i>Smilax china</i>	サルトリイバラ	IV	II	III	IV	III	IV	V	III	IV	V	V	V	IV	IV	V	V	IV	III	I	V	V	V	IV	I	V	I	V	V	V	IV	I	V	I	V	I	V	I	V	V	V	IV	V	V	V	V	V	V	V			
<i>Quercus serrata</i>	コナラ	.	I	I	II	III	I	V	III	II	IV	.	V	V	III	II	V	V	V	I	.	V	V	V	V	V	V	V	I	.	V	V	V	V	V	V	V	V	V	III	V	.	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
<i>Pleiblastus chino</i>	ネサザ類	
<i>Quercus glauca</i>	アラカシ	.	V	V	V	.	IV	IV	IV	.	III	III	IV	V	.	II	.	V	II
<i>Quercus variabilis</i>	アヘマキ	II	.	.	.	IV	II	I	I	.	I
<i>Quercus acutissima</i>	クスギ	.	.	I	II	.	.	V	I	.	I	.	IV	III	IV	.	III	V	III	.	I	.	III	.	I	
<i>Sasa spp.</i>	ササ spp.
<i>Magnolia obovata</i>	ホオノキ	I	.	.	I	.	I	.	I	.	II	.	.	III	III	I	III	II	IV	I	II	I	.	I	III	II	II	IV	IV	III				
<i>Quercus crispula</i>	ミズナラ	IV	I	II	III	V	V	III	I	II	V	IV	IV	III	III	IV	III	III	IV	IV	III	IV	III	IV	III	IV			
<i>Quercus aliena</i>	ナラガシワ	II	II	
<i>Quercus dentata</i>	カンナ	
<i>Pasania edulis</i>	マリン	.	II	.	I	I

literature 1:7,8,11,12,14,17,19,20,24,27,28,32,42,45; 中西ほか(1977); 2:Ishida et al.(1998); 3~6:宮脇(1981); 9,10:宮脇(1982); 13:波田ほか(1994); 15:Original; 16:亀山(1974); 18,40:滋賀県自然環境研究会(1979); 21,41,44:宮脇(1985); 22,43:宮脇(1979); 23:宮脇ほか(1977b); 25:宮脇(1986); 26:宮脇ほか(1977a); 29:宮脇ほか(1984a); 31:宮脇ほか(1984a); 33:宮脇ほか(1981); 34,48:宮脇(1987); 35:近藤(1978); 36:中西ほか(1979); 37~39:武田(1981); 46:相沢ほか(1976); 47:宮脇ほか(1983); 49:宮脇・佐々木(1980). 樹林名 1:Pinus densiflora forest(アカマツ林), 2:Quercus glauca forest(アラカシ林), 3:Styrax japonica forest(エゴノキ林), 4:Quercus acutissima forest(クスギ林), 5:Castanopsis cuspidata forest(コジイ林), 6:Quercus serrata forest(コナラ林), 7:Quercus crispula forest(ミズナラ林).

用いられ、丹波、播磨、山城、大和なども畿内よりカシワの多量の貢納が行われたことが示されている（例えば丹波では年120万枚以上）。植物分類上カシワが他のブナ科コナラ属の種と明確に認識されたのは江戸時代中期以降であって、それまではコナラ属の他の種との区分がされていなかった（細見，1992）。細見（1992）は延喜式や古典に載せられているカシワは植物分布上、葉の大きさ、利用面、古典から分析してカシワではなくコナラであったとしている。現在丹波、播磨などの地方には植栽されたカシワを除いてまったくカシワは分布しておらず、年120万枚の採取等を考えると、カシワをコナラとするのは妥当である。木村（1988）、野本（2005）が述べているように、古くはコナラだけではなく、地方名としてカシワの名称が残るアカメガシワ、ホオノキ、サルトリイバラ、カクレミノなどの炊事や食事（食器、包装用）に利用された各種植物がカシワと総称されていたと認められる。サルトリイバラ、コナラなどの「総称カシワ」に盛られたあるいは包まれたもちが古代、中世に「かしわもち」という名称でよばれていたかどうかは明らかでないが、以下に示す「つばきもち」が平安時代に存在したように端午の節句とは無関係に、葉で包まれたちは古くから存在していたと考えられる（下中，1961）。

かしわもち型のもちのもっとも古い記録は宇津保物語（970～980年代）、源氏物語（1007年）に記されている「つばきもち」である（有岡，2005；下中，1961；渡辺，1996）。端午の節句にカシワのかしわもちを供える風習は17世紀ごろの江戸の武家社会に始まったが、それは、カシワの旧葉が新葉の展開まで枝についていることから家系継続の象徴としてカシワを用いたからとも言われている（渡辺，1996）。江戸時代には参勤交代などを通じて、端午の節句にカシワでくるんだかしわもちを供えるという風習が全国に伝わったと推定される。しかし、葉で包んだもちが古くより存在した西日本に、端午の節句に「かしわもち」を供えるという新たな風習が取り込まれても、カシワの自生していない地域では、カシワのかしわもちは、地域に定着、あるいは在来の葉で包んだもちとは置き換わらなかったと考えられる。カシワの葉の売買が行われていた江戸とその周辺およびカシワの葉を得るためにカシワを植栽した地域（兵庫県丹波地方、千葉県総台地、群馬県高崎市など）、カシワとよく似たナラガシワの分布している地域（兵庫県丹波地方）にのみカシワあるいはカシワ似の葉でくるんだかしわもちが定着したのであろう。今回の結果でもカシワのかしわもちは、1930年代では関東が中心で他の地域は少ない。現在、カシワのかしわもちが全国的に主流となっているが、それは、カシワの葉が韓国、中国より輸入され、安価で大量のカシワが確保されたことも一因である。

カシワを除くかしわもちに利用される葉は、すべて

各々の地域の里山に自生するか、葉の採取以外の目的で庭等に植栽された植物に由来する。そのなかでサルトリイバラが西日本を中心とした広い地域で圧倒的に多く利用されているのは、表5に示されているように各種の樹林に高い頻度で出現し、里山に分布する身近な植物であることによっている。中西ほか（1977）は暖温帯の里山林をアカマツ・サルトリイバラオーダーにまとめ、その標徴種にサルトリイバラをあげている。その他、個体数が多く採取が簡単であること、葉の形状がもちを包むのに適当であること、葉の香りが良いことなども利用される条件であろう。千葉県などではまんじゅうを蒸す時に下敷きとしてサルトリイバラを利用しているが（日本の食生活全集編集委員会，1989a）、このような炊く葉としての例は古代の利用方法に近い。

サルトリイバラの葉が炊く葉として利用されていることとサルトリイバラをカシワとよんでいる地域（福岡県、山口県、島根県、兵庫県、和歌山県など）があることに加え、サルトリイバラのかしわもちは山口県、島根県、鳥取県、滋賀県などではかしわもちと呼ばれていること（日本の食生活全集編集委員会，1989e,1991c,1991d；滋賀の食事文化研究会，2000）、奄美大島から九州を経て関東地方、伊豆大島、佐渡島まで広く分布していること、各々の地域ごとに固有の名称（表2）と製法・形態を有し、古い時代に広がったと推定されることなどを総合的にみると、かしわもちの原型はサルトリイバラ利用のもちと考えられる。

節句もちの利用植物は今回の調査結果をみても30種類以上確認できた。各々の地域は、それらの地域の風土、伝統、食文化などを通じ、長い時間をかけてもちを包む植物を選び、利用してきたものと考えられる。植物の選択については、伝統や文化が関与しているので自然的な条件だけで決定されているのではないが、選択された種の地理的分布や生育立地、生育量については明らかにすることができた。カシワという特殊例を除いて、選択された種は各々の地域において、ノイバラクラス、コナラ・イヌシデ群団等の身近な里地・里山の主要な構成種であって、もっとも利用しやすい種の一つであることが確認できた。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、兵庫県立人と自然の博物館 毛利敏治先生、橋本佳延氏、佐藤美津美氏、岩切環境技研株式会社 岩切康二氏には各地のかしわもち、ちまきを購入し、提供いただきました。兵庫県立人と自然の博物館（現 宝塚市自然保護協会）足立 勲先生には兵庫県下のかしわもち、ちまきに関する情報の提供と御助言をいただきました。神戸大学大学院発達科学部 大

学院生 福井 聡氏, 姫路市立生涯学習大学校2年人と植物コースの方々にはかしわもち, ちまきに関する資料の収集および提供でたいへんお世話になりました。川西市黒川在住の今西 勝様, 宝塚市西谷在住の岡田照代様にはナラガシワで下包みした後にヨシでつつんでシュロでまくという固有の形態をもった「ちまき」をいただきました。以上のような情報と節句もちの提供によって本論文をまとめることができました。

皆様に深く御礼を申し上げます。

要 旨

1. 端午の節句に供えられる全国のかしわもち, ちまきについて, 利用植物, もちの名称, 葉の利用形態, もちの種類などの調査を文献や聞き取りによって行った。
2. 46都府県よりかしわもち型224地点, ちまき型200地点の情報が得られた。
3. かしわもち型の利用植物は17種類で, サルトリイバラ(127)がもっとも多く, カシワ(57), ホオノキ(7), ミョウガ(7), ナラガシワ(5), コナラ(4)であった。サルトリイバラの利用は西日本に多いが, 佐渡や関東地方にも認められた。カシワは東京を中心とした関東地方で利用されていた。
4. ちまき型の利用植物は21種類で, ササ類(108)がもっとも多く, ヨシ(28), ススキ(22), タケ類(14), マコモ(8), ゲットウ(7), トチノキ(4), ナラガシワ(4)であった。裏日本側ではササ類, 表日本側ではヨシ, ススキ, マコモ, 南九州ではタケ類, 九州南端から琉球列島ではゲットウがよく利用されていた。
5. カシワを除く節句もちの利用植物は, 各々の地域の里地・里山景観を構成するノイバラクラス, コナラ・イヌシデ群団, アカマツ群団, ヨシクラス, ススキクラスなどの代表的な構成種であり, きわめて身近な植物であった。カシワの利用は17世紀に江戸で始まったが, その拡大は20世紀初頭も関東周辺で止まっていた。その要因として里地・里山の植物ではないカシワの入手が困難なためと考えられた。

文 献

- 相沢陽一・瀬沼寛一・高橋卓一・山本敬一(1976)小千谷の植生。小千谷の自然, 195-236。
- 秋田市(編)(2003)秋田市史。秋田市, 秋田。
- 赤穂民俗研究会(1989)赤穂の民俗8 千種川流域編。赤穂市教育委員会, 赤穂。
- 赤穂民俗研究会(1992)赤穂の民俗10 福浦編。赤穂市教育委員会, 赤穂。
- 阿仁町史編纂委員会(編)(1992)阿仁町史。阿仁町, 阿仁。
- 青野川・黒川水系民俗調査団(編)(1979)兵庫県民俗調査8 青

- 野川・黒川水系民俗調査報告書。兵庫県教育委員会, 神戸。
- 有岡利幸(2005)資料 日本植物文化誌。八坂書房, 東京。
- 文化庁(編)(1969)日本民俗地図 年中行事1。国土地理協会, 東京。
- 鳥海町史編纂委員会(編)(1985)鳥海町史。鳥海町, 鳥海。
- 愛媛県生涯学習センター(2004)えひめ, その食とくらし。愛媛県教育委員会, 松山。
- 八郎潟町史編纂委員会(編)(1977)八郎潟町史。八郎潟町, 八郎潟。
- 波田善夫・小新真代・福澤好晃・西本 孝(1994)岡山県南部の二次林と地形・地質。岡山県自然保護センター研究報告, 1, 11-28。
- 服部 保・石田弘明(2000)宮崎県中部における照葉樹林の樹林面積と種多様性, 種組成の関係。日本生態学会誌, 50, 221-234。
- 服部 保・南山典子・川村真紀子・小野由紀子・石田弘明(2003)照葉人工林の種多様化に関する研究。ランドスケープ研究, 66(5), 509-512。
- 服部 保・南山典子・松村俊和(2005)猪名川上流域の池田炭と里山林の歴史。植生学会誌, 22, 41-51。
- 服部 保・小野由紀子・鍛冶 清・石田弘明・鈴木 武・岩崎正浩(2001)臨海部における照葉人工林の種多様性と種子供給源の関係。ランドスケープ研究, 64(5), 545-548。
- 服部 保・矢倉資喜・浅見佳世・武田義明・石田弘明(1997)三田市フラワータウンにおける蝶類群集からみた植生の自然性評価。植生学会誌, 14, 47-60。
- 本荘市(編)(2000)本荘市史 文化・民俗編。本荘市, 本荘。
- Horikawa, Y.(1972)Atlas of the Japanese flora. Gakken Co., Tokyo。
- Horikawa, Y.(1976)Atlas of the Japanese flora. Gakken Co., Tokyo。
- 細見末雄(1992)古典の植物を探る。八坂書房, 東京。
- 細見末雄(1999)丹波・但馬の植物民俗。細見園枝, 氷上。
- 兵庫県教育委員会文化課(編)(1970)兵庫県民俗調査報告2 小代地区民俗資料緊急調査報告書。兵庫県教育委員会, 神戸。
- 兵庫県教育委員会文化課(編)(1972)兵庫県民俗調査報告4 西播磨地区民俗資料緊急調査報告書。兵庫県社会文化協会, 神戸。
- 兵庫県教育委員会文化課(編)(1974)兵庫県民俗調査報告書5 但馬海岸地区民俗資料緊急調査報告書。兵庫県社会文化協会, 神戸。
- 井川町史編纂委員会(編)(1986)井川町史。井川町, 井川。
- Ishida, H. and Hattori, T.(1998)Castanopsis cuspidata dominated coppices in southern Miyazaki Prefecture. Nature and Human Activities, no. 3, 23-37。
- 伊藤邦男編(1990)佐渡植物歳時記 佐渡植物第6集。佐渡の植物刊行会, 佐渡。
- 角館誌編纂委員会(編)(1985)角館誌第九巻。角館誌刊行会, 角館。
- 亀井千歩子(1996)日本の菓子。東京書籍, 東京。
- 龜山 章(1974)大阪府山田池公園の植生。大阪府南部公園事務所, 大阪。
- 川西市教育委員会社会教育課(編)(1975)国崎 一庫ダム水没地区民俗資料緊急調査報告書。川西市教育委員会, 川西。
- 木村陽二郎(1988)図説 草木辞苑。柏書房, 東京。
- 神戸新聞社学芸部(1971)兵庫探検・民俗編。神戸新聞社, 神戸。

- 近藤治隆 (1978) 佐渡の植生. 新潟県立教育センター研究報告, 18, 59-68.
- 倉田 悟 (1962) 樹木と方言. 地球社, 東京.
- 増田町史編纂委員会 (編) (1997) 増田町史. 増田町, 増田.
- 松田 修 (1970) 増訂 萬葉植物新考. 社会思想社, 東京.
- 松田 修 (1980) 古典植物辞典. 講談社, 東京.
- 南日本新聞社 (2004) かがしま味紀行 家伝直伝. 南日本新聞開発センター, 鹿児島.
- 宮脇 昭 (編) (1979) 長野県の現存植生. 長野県, 長野.
- 宮脇 昭 (編) (1981) 日本植生誌 九州. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭 (編) (1982) 日本植生誌 四国. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭 (編) (1983) 日本植生誌 中国. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭 (編) (1984) 日本植生誌 近畿. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭 (編) (1985) 日本植生誌 中部. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭 (編) (1986) 日本植生誌 関東. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭 (編) (1987) 日本植生誌 東北. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭・村上雄秀・鈴木伸一・鈴木邦雄・佐々木寧 (1981) 広野地区およびその周辺域の植生. 横浜植生学会, 横浜.
- 宮脇 昭・奥田重俊 (編) (1990) 日本植物群落図説. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・大山弘子・山田政幸 (1977a) 佐倉市の植生. 佐倉市, 佐倉.
- 宮脇 昭・奥田重俊・望月陸夫 (1994) 改訂新版 日本植生便覧. 至文堂, 東京.
- 宮脇 昭・奥田重俊・佐々木寧・松井 浩・鷹野秀夫・鈴木伸一・塚越優美子・益田康子 (1983) 高畠町の植生. 高畠町, 高畠.
- 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木伸一・塚越優美子・金 聖徳・金 鍾元 (1984a) 沼田市の植生. 沼田市, 沼田.
- 宮脇 昭・佐々木寧 (1980) 下北半島周辺の植生. 横浜植生学会, 横浜.
- 宮脇 昭・佐々木寧・飯野和子 (1976) 比企丘陵の植生. 横浜植生学会, 横浜.
- 宮脇 昭・鈴木邦雄・藤原一絵・原田 洋・佐々木寧 (1977b) 山梨県の植生. 山梨県, 甲府.
- 宮脇 昭・鈴木伸一・鈴木邦雄 (1984b) 塩那道路周辺 (栃木県) の植生. 栃木県土木部, 宇都宮.
- 中西 哲・武田義明・服部 保 (1977) 播磨西部地域の植生. 播磨西部地域植生調査報告書, 70-144. 播磨西部地域植生調査研究会, 神戸.
- 中西 哲・武田義明・服部 保・津田真理子・小林ゆかり (1979) 匹見地方の植生. 匹見川水系動・植物現況調査報告書. 新匹見地点環境調査委員会, 広島, 1-76.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1984) 日本の食生活全集3聞き書岩手の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1985a) 日本の食生活全集8聞き書茨城の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1985b) 日本の食生活全集15聞き書新潟の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1985c) 日本の食生活全集26聞き書京都の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1985d) 日本の食生活全集33聞き書岡山の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1985e) 日本の食生活全集42聞き書長崎の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1986a) 日本の食生活全集2聞き書青森の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1986b) 日本の食生活全集5聞き書秋田の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1986c) 日本の食生活全集20聞き書長野の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1986d) 日本の食生活全集22聞き書静岡の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1986e) 日本の食生活全集39聞き書高知の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1987a) 日本の食生活全集7聞き書福島の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1987b) 日本の食生活全集18聞き書福井の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1987c) 日本の食生活全集24聞き書三重の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1987d) 日本の食生活全集34聞き書広島島の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1987e) 日本の食生活全集40聞き書福岡の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1987f) 日本の食生活全集43聞き書熊本本の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1988a) 日本の食生活全集6聞き書山形の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1988b) 日本の食生活全集9聞き書栃木の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1988c) 日本の食生活全集13聞き書東京の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1988d) 日本の食生活全集17聞き書石川の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1988e) 日本の食生活全集38聞き書愛媛の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1988f) 日本の食生活全集47聞き書沖縄の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1989a) 日本の食生活全集12聞き書千葉の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1989b) 日本の食生活全集16聞き書富山の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1989c) 日本の食生活全集23聞き書愛知の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1989d) 日本の食生活全集30聞き書和歌山の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1989e) 日本の食生活全集35聞き書山口の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1989f) 日本の食生活全集46聞き書鹿児島島の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1990a) 日本の食生活全集4聞き書宮城の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1990b) 日本の食生活全集10聞き書群馬の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1990c) 日本の食生活全集19聞き書山梨の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1990d) 日本の食生活全集21聞き書岐阜の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1990e) 日本の食生活全集36聞き書徳島の食事. 農山漁村文化協会, 東京.
- 日本の食生活全集編集委員会 (1990f) 日本の食生活全集37聞き書

香川の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1991a）日本の食生活全集25聞き書滋賀の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1991b）日本の食生活全集27聞き書大阪の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1991c）日本の食生活全集31聞き書鳥取の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1991d）日本の食生活全集32聞き書島根の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1991e）日本の食生活全集41聞き書佐賀の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1991f）日本の食生活全集45聞き書宮崎の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1992a）日本の食生活全集11聞き書埼玉の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1992b）日本の食生活全集14聞き書神奈川の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1992c）日本の食生活全集28聞き書兵庫の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1992d）日本の食生活全集29聞き書奈良の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本の食生活全集編集委員会（1992e）日本の食生活全集44聞き書大分の食事・農山漁村文化協会，東京．
 日本植物友の会（編）（1967）日本植物方言集（草本類篇）．八坂書房，東京．
 野本寛一（2005）栃と餅．岩波書店，東京．
 能代市史編さん委員会（編）（2004）能代市史 特別編 民俗．能

代市，能代．
 男鹿市史編纂委員会（編）（1995）男鹿市史．男鹿市，男鹿．
 大館市史編さん委員会（編）（1981）大館市史第4巻．大館市，大館．
 齊藤政美（1995）おばあさんの植物図鑑．葦書房，福岡．
 千畑村郷土誌編纂委員会（編）（1986）千畑村郷土誌．千畑村，千畑．
 仙南村村史編纂委員会（編）（1992）仙南村郷土誌．仙南村，仙南．
 滋賀県自然環境研究会（編）（1979）滋賀県の自然．滋賀県自然保護財団，大津．
 滋賀の食事文化研究会（2001）つくってみよう滋賀の味．サンライズ出版，彦根．
 下中邦彦（編）（1961）国民百科事典2．平凡社，東京．
 下中邦彦（編）（1962）国民百科事典5．平凡社，東京．
 新村 出（編）（1955）広辞苑．岩波書店，東京．
 鈴木秀夫（1962）日本の気候区分．地理学評論，35，205-211．
 鈴木貞雄（1978）日本タケ科植物総目録．学習研究社，東京．
 大雄村史編纂委員会（編）（2001）大雄村史．大雄村，大雄．
 武田義明（1981）アカマツ - サイゴクミツバツツジ群集について．神戸大学教育学部研究集録，66，109-125．
 田村和也・服部 保・高比良響（1999）海岸性カシワ林・ニレ科林の地理的分布．人と自然，no. 10，49-60．
 谷垣佳蔵（1973）但馬の民俗 年中行事（二）．但馬文化協会，豊岡市．
 豊能町史編纂委員会（1987）豊能町史 本文編．豊能町，豊能．
 若美町史編さん委員会（編）（1981）若美町史．若美町，若美．
 渡辺弘之（1996）樹木がはぐくんだ食文化．研成社，東京．
 山本候充（編）（2004）日本銘菓事典．東京堂出版，東京．

（2006年8月8日受付）
 （2006年11月7日受理）